

【ガンバルゾム5峰 北西稜初登攀】

未踏峰のターゲット選定と登攀タクティクス、求められた事柄について

鈴木 雄大 (稲門山岳会)

今回、馬目さんより、ガンバルゾム遠征について「何かテーマを持って執筆してほしい」とご依頼を頂き、自分なりに遠征を振り返ってみた。遠征を終え、多くの人に、「どうやってこんな山域の未踏ルートを見つけたのか」という質問を多く頂いたので、まずは対象の選定について、そして初登攀で実際に行った登攀タクティクスや求められた事柄について、考察したいと思う。

尚、詳細な登攀概要については『ROCK&SNOW 102号』および『HIMALAYA No.507』にも発表しているので、そちらをご参照いただきたい。

1) 【対象】

・パキスタン ヒンドウーラジ山脈



図1 カラコルムとヒンドウークシュの間にある山脈、最高峰はコヨゾム6,872m

・ガンバルゾム

ダルコット村から一望できる巨大な山塊。1～5峰のそれぞれ独立した鋭利なピークからなる。最高峰である1峰には、1973年にイタリア隊が南面（写真の反対側）から登頂しているが、その他の4つのピークは完全な未踏峰と思われる。イタリア隊の記録も詳細なものはなく、出発段階では未知に包まれたピークであった。写真左から4、3、2、1（メイン）、そして我々が登攀した5峰となっている。ヒマラヤ名鑑には「北面は高度3,000mに及ぶ大氷壁で、峰々の間から懸垂氷河が落ちている。ダルコッ



写真1 ガンバルゾム山群全景



写真2 From the BC at 3380m

ト峠からこの山の北面を眺めると、全く登攀ルートは見出せない」との魅力的な記載が見つかった。

2) 【情報の少ない山域でのターゲット選定について】

今回、私がこの山を遠征先として選び、巨大な山塊の中に唯一とも言える登攀ルートを見出せたのは幸運だったと言える。だがその中にも、限られた不確かな情報を取捨選択し、実際に登攀を成功させるまでに様々な行動を起こしてきた。未踏ルート発見と、その登攀に至るまでの実際のプロセスを以下に列挙する。

① 山との出会い

これは運と日頃の研究作業が必要である。今回に関しては、パキスタンの地図をなんとなく眺めていて、「頑張るぞ」という日本語的な響きから、この山の名前を少し前から認知していた。そして、昨年のパキスタンG6峰遠征の際に、英国人クライマーのトム・リビングストンに出会い、ガンバルゾムの向かいにあるコヨゾムの様々な素晴らしい話をしてくれたことから、本格的に興味を湧いてきた。

② パキスタンの山で人が少なそうな未踏のエリアを調べた

これは予算にも大きく関連する項目であり、本遠征では、規制が少なく、かつ静かなエリアに行くことは、隊の事情からも必然といえた。というのも、例えばパキスタンと聞いて、まず思い浮かびそうなK2やガッシャーブルムのようなメジャーエリアにおいては、リエゾンオフィサーを雇う必要があり、それに応じてコックや彼らの食糧・ギアを運ぶポーター、そしてそのポーターが食べる食糧や寝床など、芋蔓式に遠征費用が嵩んでいく。ここを一気に削減するため、最終の村から徒歩4時間というアプロー

チ且つ、リエゾンのいらないガンバルゾム山群が遠征候補となった。

③ 書籍

インターネットに情報が散見される時代において、書籍に記載されている情報はやはり価値がある。

しかし、この山に関しては、数十年前の反対側からのトライの概要は見つかったものの、簡易的過ぎて殆ど参考にはならなかった。それでも確かにこの山があることと、ぼやけた山の輪郭は確認できた。

④ インターネット

まずはAmerican Alpine Journalのネット版で検索をかける。すると、イタリア隊が南側から50年前に登頂していることは分かったが、やはり詳細はなし。過去にヒンドゥーラジの別の山をトライしたクライマーの記述から、「ガンバルゾムの北北西リッジは偉大なアルパインクライミングのチャレンジになるだろう」との記載があった。我々は当初、北壁を目指していたが、結局このリッジしかトライできるところがなく、登ることとなった。最悪何も登攀対象がなかった時に、このリッジはなんとかトライすることができるのでは？という意味でも、この一文の持つ意味は大きかった。

⑤ Google Earth

なんとなく壁の雰囲気は掴めるが、セラックやクレバス、ルートの詳細までは、あくまで想像力を高める程度のものに過ぎない。とはいえ海外の未踏ルートを探す際に、現代において最も有力な手段の一つだろう。

⑥ SNS

敢えてネットと項目を分けるが、現代のクライマー

が記録をまず初めに発表するのは、書籍でもAAJでもなく、Instagramやフェイスブックが多い。SNSだから不確かなのではないかという疑いは持ちつつも、ここで写真を漁って情報を得ることができる。今回は、何者だか分からないが、ダルコットの隣村に住む自称写真家の人物と繋がることができ、ガンバルゾムの写真をWhatsAppで何枚か送ってもらった。やはり現物を見るまでは不信感が拭えないが、終わってみれば、彼の差し出す情報は割と正しいものが多かった。最近ではパキスタンやネパールの奥地にもスマホやネットが普及しているので、観光客や村人が何気なくアップしている写真に、良い登攀対象が眠っている場合もある。

⑦ 現地でのルート選定

現場に入れば、あとは現実と向き合うだけ。限られた候補の中から合理的でチャレンジングなラインを選定する。長時間セラックに晒されないか、日中クレバスは崩壊して危なくないか、落石はどうか、手掛かりとなるクラックやアイスはあるのか。簡単でも危険なルートや、魅力的だが不確定な危険度の大きいルートを避け、技術的に難しくても安全なところ、そして山頂までラインを繋げた時に自分たちが美しいと思えるラインが登攀ルートとなる。アルパインクライミングのライン選定については、谷さんが「登山研修」vol.38にて詳しく書かれているので、そちらを参考にして頂きたい。

⑧ 行動＝何より現地に行くこと

上記、自分なりにこの未踏峰、ルートを見つけた出した過程を洗い出したが、結局は何より行くことが大事だと感じた。

費用や時間、自身の心技体や遠征メンバー間でのパートナーシップなど、充分準備ができていないか、

様々な不安はあるが、ハズレ覚悟でも行ってみると、良い登攀対象が待っているかもしれない。

3) 【行程表】表 1

4) 【未踏の北西稜登攀のタクティクス】

ガンバルゾム5峰北西稜は大まかに考えると以下の3つのセクションに分類され、コルから山頂まで約3.7kmの長大な稜線である。そして、その稜線の中には、高さ60mや100mを超えるミックス壁、そして無数の短いピッチのクライミングセクションが含まれ、単に歩ける稜線という訳ではない。また、周辺の雪崩やセラックの危険から、下降も同ルートにとらざるを得ず、シビアなクライムダウンを長時間にわたって行い、登り以上に苦勞をさせられたことも今回のリッジクライミングの特徴であった。

① C1=5400mまで。4600mのABCを出て2時間ほどの地点から始まる約1kmのギザギザとした稜線。

ここはクライミングの技術的にはそれほど難しくはないが、一度でもバランスを崩せば、稜線の左右は奈落の底まで切れ落ちており、気の抜けないセクション。技術的には、基本的に国内岩場のⅢ級～Ⅳ級が続き、数箇所10m程度のM4または5.7～8程度が出てくるような内容。



写真3 Complicated ridge at the bottom half

それら全てでビレイをしていたら時間が幾らあっても足りない厄介なリッジであった。

序盤で1箇所のみ、80°/55mの脆いIV+級程度が出てきたので、そこはしっかりとビレイを行い、あとはロープスケールで15~20ピッチ分を2ピッチ程度の同時登攀で通過した。隊でナノトラクションを3つ携行していたので、難しいところを通過した後や、屈曲点などに設置することで、フォールやロープドラッグのリスクを軽減した。お互いの力量を概ね把握し、国内トレーニングを積み重ねてこなければ、ここまでボールドな同時登攀はできなかったと言える。

5000mを超えてくると、滞在しているだけでも体は消耗していくはずなので、高所の大きな壁や山では、チームでの同時登攀スキル及びパートナーシップは、非常に重要だと改めて感じる事となった。また、特にファーストクライ時は、未踏のリッジならではの、先が見えない冒険感に踊らされる内容の、厄介ではあるが面白さのあるセクションだった。



写真4 Simul climb at the bottom section. We climb in 1 pitch for probably 20 pitches

② C1からC2=5750mまで。本格的なスタカットクライミングが必要な技術的核心部

この辺りから、極端にクライミング要素と強度も上がってくる。まずは60°程度の氷を駆け上がると、

100m超えのミックスクライミングセクションに直面。積み木状の脆い岩が、氷や雪でコーティングされて何とか留まっているような岩壁で、如何にも「グレード以上に悪い」といった表現が当てはまりそうなセクション。これは北海道でいうところの、小樽赤岩、雷電海岸、千代志別、そしてカミホロにでも来てい



写真5 Kei Narita leading the chossy mix pitch



写真6 Almost last part of the technical crux



写真7 Yudai Suzuki leading the 5.9 finger crack with dry tooling

3. 海外登山記録

るかのような岩質だった。脆い中にも、マシそうなところを縫うようにクライミングし、2ピッチで岩頭まで。確実に国内での、特に道内でのクライミング経験が生きたピッチであった。この先も一部垂直な15m程度が2回、最後に50mの滝谷のようなピッチがリッジの中に現れ、初日と比べても格段にペースは下がったが、リッジの中に次々と現れる「未踏の壁」を対処して行くのは、なかなか面白かった。

③ C2から山頂=6,400mまで、青氷が主体の斜度50°~70°の稜線

BCから睨んでいた時は、ここはもうウィニングロードである徒歩主体の雪稜なのでは？という淡い期待もあったが、やはりヒマラヤのピークは甘くなかった。雪稜のセクションが始まると同時に、これ



写真8 Snow and ice ridge. We had to climb down and traverses many pitches. Super exhausting



写真9 Summit from left Narita, Nishida, Suzuki

は剛鉄のような氷であると分かり、嫌気がさす。あと1.5kmはこの氷の稜線と対峙しなければならない。そして下降も、崩壊の進む氷河に逃げ道はないので、1.5kmここをクライムダウンしなければならない。グレードこそWI3の50°~70°程度だが、その長さで、それを5,750~6,400mの高所で往復させられるというのが、このリッジの正に核心であった。極め付けは、ここまでの岩主体のクライミングにより、アイゼンとアックスが丸まっていることだった。ここもビレイなどしていたら食糧が尽きるのでは、全て同時登攀で行う。スクリュー6本とスノーバー2本をできるだけ温存しつつ、使うチャンスがあれば設置する。大体60mに2本は設置するよう努めたが、どうしても氷が緩かったりして使えないセクションもあるので、そこはお互いに信じるしかない。

登攀2日目に序盤の2時間程、3日目に山頂往復で14時間、4日目にクライムダウンの続きで6時間程かかっているため、合計22時間もこの単調な氷、雪稜の登り下りに費やしていることになる。

④ 下降

上記の通り、長時間に渡る青氷のクライムダウンが山行全体を通して一番の核心であった。途中、アバラコフによる懸垂下降も行ったが、長大なルートに対して、余りにも時間効率が悪かったため、覚悟を決めてクライムダウンで何とかした。登り同様、ナノトラクションを噛ませつつ、同時に下降し続けた。3人いると、それぞれのいる地点の微妙な難度さによって、(氷が硬いところにいる人は遅く、その先で柔らかいところを通過する人は早いなど) また、個人差によっても、一本のロープを通じて上手くペースを均等に保つのが難しかった。

雪と氷のセクションを超えると岩主体で時々雪のリッジの下降となるが、懸垂下降をするにしても、

リッジにそって斜め懸垂などが多く出てきて、隊員1名は大きく振られて打撲してしまった。大きく振られるルート取りの場合は、1人目が慎重に降りるのは勿論だが、下の待機点でロープをなるべく張って固定しておくべきだった。その後も懸垂下降中にロープに落石を当ててしまい、切断してしまうという事があった。疲れていても、面倒でもこう言ったシーンではロープを肩に束ねて懸垂下降するのが筋であった。高所で疲れている時に、このような小さなミスが連続がやがて致命傷になると感じた。

最後まで気を抜かず、悪い岩のトラバースや、ロープスケール約15ピッチ分の同時クライムダウンなどして、ギアも体もすり減らして安全圏に降りる事ができた。

残地ギアは、ナッツが1、ハーケンが1、捨て縄20m程度であった。岩質の特性上、クラックそのものが広がりそうな箇所が多く、なるべく大きな岩に捨て縄、という支点のパターンが多かった。

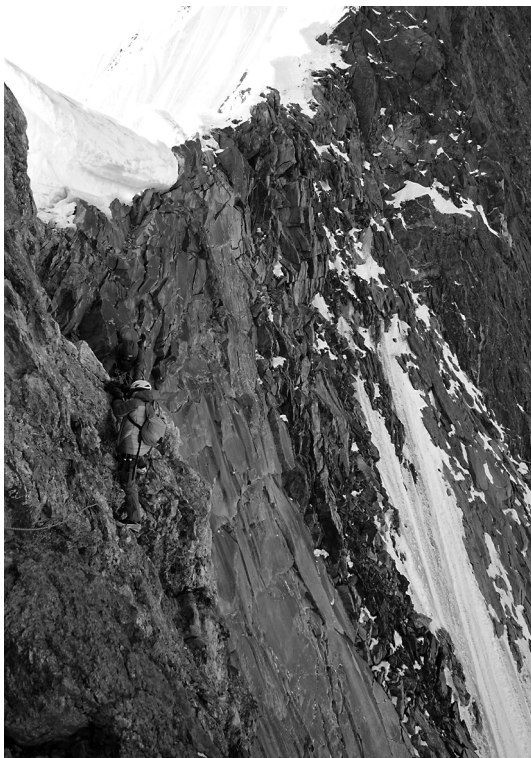


写真10 下降でいやらしいトラバース

5)【求められた能力】

① 50~70°の簡単なアイスまたは硬い雪、新雪を永遠に登る体力

例えば成田は、日高のコイカクなどで、鈴木はカナダ・ポーラーサーカスなどで（共に600mを超える登攀距離）に登るなど、今シーズンは割と傾斜のない氷を長距離登ることはしていた。

また、一見関係ないようだが、山スキーの登行及び、滑降も、山行内容によっては太ももが焼けるように鍛えられるので、脚をつくるという意味では有効だった。冬の北海道で最低でも週4回は滑るように努め、脚を鍛えていた。高峰でのアルパインクライミングだけを追求するなら、ある程度のクライミング能力（所謂グレード的なもの）があれば、後は体力やメンタル強化に費やした方が良いのではと、今回も改めて感じた遠征となった。

② 高所のためのトレーニング

本遠征の4ヶ月前に行ったペルー遠征（6,400m）で息切れが激しかったこともあり、獲得標高差2,000mを超えるようなハイキングをコースタイムの半分以上で登るような山行を増やした。また、6月から8月は暑かったのもあり、週2回程度水泳を行っていた。効果は数字で出ないので不明だが、明らかにペルー遠征より高所的な意味での調子は良かった。

（SPO2の数値は両遠征で大した差異はなかった。）

③ グローブとアイゼンでの岩登り

夏期はクラックを中心に登った。冬期も小樽赤岩や錫杖、カミホロ、滝谷など通ってテムレスでの岩登り感覚を養った。海外の大きな壁では必然的にランナウトが強いられるので、登り込んで自信をつけるのは良かった。今回のルートに関しては、何も5.13やM10が登れなくても、特段問題はなかった

が、日頃から高グレードを登れば、際どい場面で心理的に楽になると感じた。

④ BCでのルート決めを含む総合的なルートファインディング能力

先のことまで考えたラインどりを考えるのは難しかった。大きな山、壁に数多く出向いて地道に感覚を磨いていくしかなさそう。国内では、普段から残地ギアに導かれるクライミングは遠慮しておく良さそう。

⑤ 耐寒能力、サバイバル能力

冬のカミホロ、荒れたハヶ岳、もしくは暴風雪の札幌や富良野の市街でさえも、マイナス20度以下という世界に通ずる寒さがある。日常的にそういった場所に出向いていたので、ある程度の寒さに抵抗はなくなった。

⑥ 連日行動できる体力

ここで言う連日行動とは、単にアタックの1週間だけでなく、BCに入る前後から含めての2～3週間に渡って継続的に必要な体力である。私はこれまで海外の高峰を目指す遠征に6回程行っているが、万全な体調でトライできた遠征は殆どなかった。寒さや暑さ、標高など、環境が悪ければ、レスト日でも満足に休める保証もなく、日程や天候、各種トラブルの都合から、強制的に10日以上何かしらの「仕事」をすることになる場合が遠征先では多いので、日頃から日数を空けずに山や岩、スキー、街でのトレーニングをしておくのが有効だと感じた。

⑦ テント生活の慣れ 如何に過酷な環境で最大限快適に過ごすか。

これは大学山学部時代に1週間以上の山行を繰り返して培ったものが大きい。

⑧ 旅、異国での慣れ。英語力、ジェスチャー力などのコミュニケーションスキル。

パキスタンは国柄、一歩ミスを犯せば即刻登山中止ということも可能性としてはあり得る。今回はテロの際にも、スタッフとも円満な関係を終始築く事ができ、事なきを得た。

⑨ パートナーシップ、チームワーク

雷電や錫杖、瑞牆での継続登攀など、いくつか印象的なルートを共に登ることができていた。3人のうち2名以上参加できたプレ山行日数は30日に及んだ。加えて、西田鈴木、成田鈴木はすでに別の遠征を経験しており、この点も安心できた。

6)【食糧について】

1人1食あたり280kcal米とスープの計100g程度を朝夕5泊分用意。初日は標高が低いので少しだけ多め。写真の一塊が一食で、米は初日以外、1食50gとしていた。(初日は80g)

その他行動食は1人900kcal程度を5日分+ α 携帯。ガス缶は中缶で4つ。食糧は全て使い切り、ガスは少量のみ余った。



写真11 成功アタック食糧

7) 【装備について】

・ロープ

1回目のトライでシングルロープであるJokerゴールドドライが大分消耗したので、2回目はダブルロープのアイスラインゴールドドライ2本に変更。戦略的な面では、シングルが同時登攀との相性が良かったが、精神的には2本ロープがあると、トラブルの際のマージンが大きい。

・プロテクション

アルパインドロー8本、カラビナ=BDオズとスリング=ベアール6mmの組み合わせ中心。軽量さとハンドリングのバランスが良かった。分厚いグローブなので、引っかけられないワイヤーフードが助かる。

カム3本 #0.75/#1/#2 BDウルトラライトの軽さとZ4の汎用性に助けられた。軽量化のため、思い切って3本まで減らした。代わりにナッツ8本とトライカム4本を追加し、重量と弾数のバランスをとった。その他にBDウルトラライトアイスクリューを6本携行。5800mあたりから終始続いていた鉄氷に良くきいてくれた。とても軽いので身につけている間も気にならなかった。

・BDビジョンハーネス

全く水を吸わないし、アイスクリッパーも付いていて、何より軽いのが良かった。ちょっとしたハンギングビレイでも腰が痛くならなかった。

・スカルパ ファントムテック

今回アタック時の予報が体感気温マイナス23度程度だったので、ダブルブーツにしようか迷っていたが、思い切ってこちらを選択した。もう一つBCに持参していたスポルティバのG2と比べると両足で480gくらい軽くなるので、本当に大きなアドバンテージだった。

流石に登頂時は寒かったが、毎晩テントに入れそうなパキスタンの6500m程度のルートならこれでど

こでも行けそう。オープンビバークが予定されているならダブルブーツが良い。

・SEA TO SUMMIT FmIII

寝袋は2人がFmIIIで、真ん中で寝る人がパタゴニアの半シュラフとした。

いざという時、(例えば一回目トライ中に1人が高山病) FmIIIは二つを連結できるので助かった。

連結するとシュラフ内スペースも広くなる上に暖かさは格段に上がる。

・グローブ

100円ショップのビニル手袋 → 2ミリ程度薄手の化繊ライナー → 防寒テムレス(青)カフの防雪改造付き。ここまでのセットで登りは問題なかった。アラスカ・ハンター北壁もペルー・アウサンガ



写真12 装備①

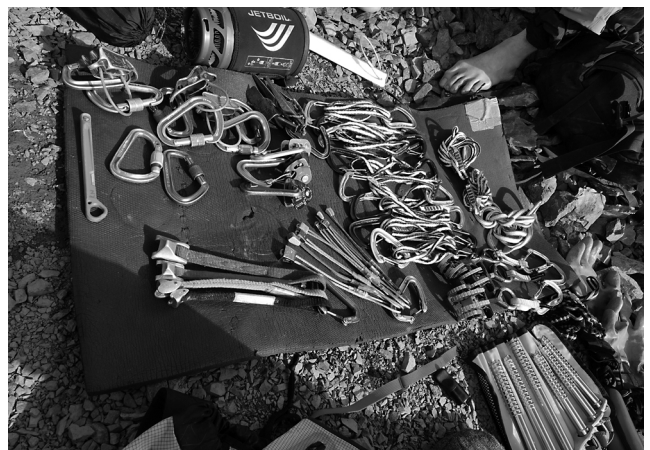


写真13 装備②

3. 海外登山記録

てもこの組み合わせで操作と耐寒のバランスがちょうど良かった。下山用に3本指のペラペラミトンと、何かあった時のヘリテージeVentダウンミトンを携行。このダウンミトンは重量135gと軽いだけでなく、就寝時に足に履かせる事ができるので、無駄なく重宝した。

8) 【参考：高所について 2023年の2つの遠征を比較】

諸条件が異なるので単純な比較はできないが、アウサンガテでは4/21に、初めて4,500m入りした際、ダッフルバッグを数メートル動かすだけでも激しい眩暈がしたのに対し、ガンバルゾムでは、8/29に4,700mまで、軽い頭痛を感じた程度で、その後も5700mまでその程度で済んだ。これはペルーでの順

応の効果が4ヶ月に渡って少なからず持続していたことを現している。

唯一ペルー遠征に参加できなかった西田に関しては、9/4の5,700m付近で激しい眩暈や吐き気、下痢や震えがあったため、よりゆっくりと順応するべきであった。(天候の問題から現実にはこれが不可能であり、かといって順応により時間を使っていたらテロによりアタック不可能であった。) 私自身も同年にペルーの高所に行ってなければ、より酷い頭痛となっていたことは容易に想像できる。

アウサンガテでは、天候や日程に大きな余裕があり、かつノーマルルートが存在したので、順応は順

調だった。1日の新標高への登高は、やはり500m前後に留めると安心なのではないか。現代では一通り、高所順応のセオリーは文献などで出揃ってはいるが、少人数でのアルパインスタイル遠征の場合、予算や日程、天候、周辺の環境、メンバー間での高所耐性のバラ付きなどがある為、様々な側面を総合的に捉え、最大限の順化をした上での良い妥協点で、アタックに踏み切る事が現実的なのかもしれないと感じている。コストをかければ簡単な山にベースを移して順化ということもできるが、そこは各隊の悩みどころであるというのが正直な感想である。

これはあくまで同一人物が同年に6,400m峰へ登った場合の比較に過ぎないので、参考程度に留めていただきたい。

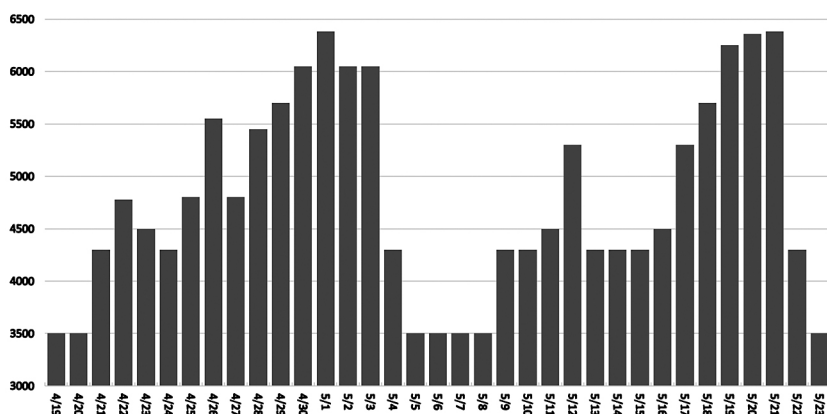


図2 ペルー・アウサンガテ (6,384m) 高所順応

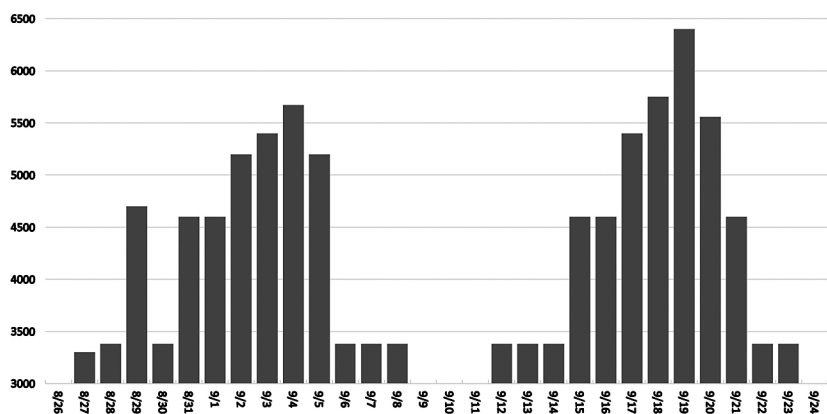


図3 パキスタン・ガンバルゾム (6,400m) 高所順応

表 1 行程表

	月日	行動内容
1	8月21日	成田空港出国
2	8月22日	深夜0時イスラマバード、そのまま朝5時の便でギルギット
3	8月23日	ギルギットにて準備
4	8月24日	ギルギットにて準備
5	8月25日	ギルギット → グピス
6	8月26日	グピス → ダルコット (最終の村)
7	8月27日	ダルコット → ガンバルゾムBC偵察 日帰り
8	8月28日	ダルコット → BC入り BC = 3380m
9	8月29日	BC → 4700mタッチして往復
10	8月30日	アタック (兼順応トライ) の準備
11	8月31日	BC → ABC (= 4600m)
12	9月1日	ABC にてレスト兼順応
13	9月2日	ABC → 5200m
14	9月3日	5200m → 5400m
15	9月4日	5400m → 5670m 高山病で敗退
16	9月5日	5670m → 5200m
17	9月6日	5200m → BC下山
18	9月7日	レスト
19	9月8日	レスト
20	9月9日	BC → ダルコットへ一度降りる
21	9月10日	レスト (村で全員下痢になる)
22	9月11日	レスト 下痢の療養
23	9月12日	代理店から「テロによる注意の喚起」を告げられ、急遽BCに戻る
24	9月13日	最後のアタック準備、レスト
25	9月14日	レスト
26	9月15日	BC 3380m → ABC 4600m
27	9月16日	ABC レスト
28	9月17日	ABC → C1 5400m
29	9月18日	C1 → C2 5750m
30	9月19日	C2 5750m → ガンバルゾムV山頂 6400m → C3 6090m
31	9月20日	C3 → C4 5560m
32	9月21日	C4 → ABC 4600m
33	9月22日	ABC → BC 3380m
34	9月23日	BC片付け
35	9月24日	午前ダルコットへ。グピスまで戻る
36	9月25日	グピス→ギルギット→フンザ
42	9月26日	9/26 - 10/1 フンザ 10/1イスラマバードへ
43	10月2日	10/2 - 4 イスラマバード
46	10月5日	帰国